様式２

令和５年度　大学との連携事業「つながる学び　みと☆Future college」実施報告書

拠点校名　水戸市立国田義務教育学校

連携大学　茨城キリスト教大学

研究主題　実体験を通して知り，気付き，よりよい生き方を考える児童生徒の育成
～　出身国の異なる留学生との意見交換を通して　～

１　主題設定の理由

本校は今年度大学との連携事業が２年目となる。児童生徒とは「相手を知ることは自分を知ること」というテーマを共有し，本事業に臨んだ。これは主題設定の基となる，昨年度から継続している本事業のテーマである。

本校が本事業において実施している分野は「国際理解」である。昨今，毎日のように国際理解，グローバル，ボーダレス，といった言葉を耳や目にする。しかし，実際のところ，児童生徒はどれくらいその言葉を肌感覚で感じることができているのだろうか。「言葉は聞いたことがあるけど，実際はよく知らない」というのが多くの児童生徒がもっている感覚なのではないだろうか。これは後に示す事前調査でその傾向が表れているが，児童生徒が「国際理解」について思考を深めるために何が足りないのか，それは世界を肌で感じることができる実体験であると考えた。今回の交流会はまさにお互いの国について実際に顔と顔を合わせて話す実体験である。相手の出身国はアジア，ヨーロッパと複数にわたり，実際に世界観に触れることでそれまで抱いていた想像とは全く違う現実に驚かされることも多いだろう。それに気付くだけで世の中の見え方が変わってくることも多々あるだろう。その体験が日本で，世界で，よりよく生きるためのヒントとなることを願い，本主題を設定した。

２　研究のねらい

児童生徒に気付かせたいことがある。それは「相手を知ること」は「自分を知ること」につながっていくことである。相手の言葉，生活習慣，文化，考え方，生き方，目標，自分（自分たち）はどう見えているのか，など相手の視点を知ることで，これまで自分自身では見えていなかった，客観視された自分（自分たち）が見えてくる。相手と自分の「相違点」や「共通点」を知ることで，世界の中に置かれた自分がこれから何をすればいいのか，自分の立ち位置を考えたくなる。参加する児童生徒は各課程の最高学年の６年生と９年生とし，今回の体験を次のステージへ向かうための糧としてほしい。本事業の中心的活動となる実体験を通して自分自身を見つめ直し，グローバル化，ボーダレス化の渦中にある今を，よりよく生きることについて考える力を育てることを本研究のねらいとした。

３　具体的な取組内容

（１）概要　・１日目は留学生５名（インドネシア２名・ベトナム２名・イタリア１名）が自国の文化紹介を行い，それを基に会話を掘り下げた。

・２日目は本校６，９年生が留学生６名（インドネシア２名・ベトナム２名・イタリア１名・ウクライナ１名）への文化紹介と質疑応答を行い，会話を掘り下げた。

・使用言語は原則英語とした。

・６年生と９年生の合同授業（５０分間）とした。

（２）期日　１日目　１１月　７日（火）６校時　**※資料１**

２日目　１２月１９日（火）６校時　**※資料２**

（３）タイムテーブル（２日目はこれに準じて本校児童生徒のプレゼンを実施）

①留学生自己紹介　５分　１４：３０～１４：３５

→　各ブースへ移動・準備　２分　１４：３５～１４：３７

②プレゼンテーション

第１ターン

A.留学生プレゼンテーション　１３分　１４：３７～１４：５０

B.質疑応答　５分　１４：５０～１４：５５

→　次のブースへ移動・準備　２分　１４：５５～１４：５７

第２ターン

A.留学生プレゼンテーション　１３分　１４：５７～１５：１０

B.質疑応答　５分　１５：１０～１５：１５

→　全体形態へ移動　**※資料３**　２分　１５：１５～１５：１７

③講評・事務連絡　３分　１５：１７～１５：２０

（４）活動表

第１ターン	ブースA	ブースB	ブースC	ブースD	ブースE
留学生出身国	インドネシア	インドアネシア	ベトナム	ベトナム	イタリア
児童グループ	C		A	B	D
生徒グループ		D	A	B	C
第２ターン	ブースA	ブースB	ブースC	ブースD	ブースE
留学生出身国	インドネシア	インドアネシア	ベトナム	ベトナム	イタリア
生徒グループ		A	C	D	B
児童グループ	A		D	C	B

資料１（第１日目の様子）

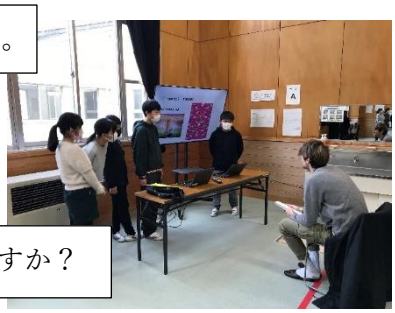
ベトナムの伝統衣装って素敵ですね。

インドネシアの建築は独特ですね。

イタリアは毎日パスタ食べるんですね。

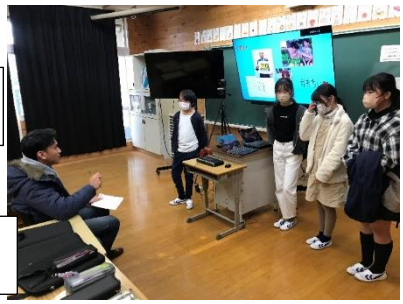
資料２（第２日目の様子）

日本では今和菓子が流行っています。



サッカーワールドカップは見ますか？

日本の伝統建築は好きですか？



「かわちい」使いますか？

その言葉の使い方を教えてください。

資料３（活動後の様子）

４　成果

相手の出身国の言語や文化について事前学習をした上で交流に臨んでいるが，実際に留学生と対面してやりとりをする中で，お互いの自国についての考えや，相手の国に対するイメージを伝え合い，それが想像と大きく違っていたり，共通していることを見出したりして話が盛り上がった。留学生の積極的な問いかけに最初は恥ずかしさもあったが，徐々に英語や日本語を使って自分から話しかけるようになった。

資料４の児童生徒の調査からも分かるように，留学生との交流会という実体験は児童生徒が海外へ目を向けたり，自分自身を見つめ直し，生き方を考えたりする絶好の機会となったことが分かる。まさに本事業の「相手を知ることは自分を知ること」というテーマについて考えを深めることができた。そして今回の実体験が双方の理解につながる一助となった。

資料４（事前調査と事後調査・大きくプラスの変化のあった項目を抜粋）

	事前調査（11 月 6 日　29 名実施）		事後調査(12 月 20 日　29 名実施)	
・外国に興味を持っているか。	６年生	７３．３％	→ ８０．０％	(6.7%↑)
	９年生	８５．７％	→ ９１．７％	(6.0%↑)
・外国のことを身近に感じますか。	９年生	３３．３％	→ ５３．３％	(20.0%↑)
	６年生	４２．９％	→ ７５．０％	(32.1%↑)
・目的があれば外国語でコミュニケーションしたい。				
	９年生	６０．０％	→ ６６．６％	(6.6%↑)
	６年生	７８．６％	→ ９１．７％	(13.1%↑)
・今後授業などで留学生などと一緒に語学や文化について学ぶ機会を増やしてほしい。				
	９年生		６６．７％	
	６年生		１００．０％	

５　課題

昨年から続いて２年目になる本事業を通して見えてきた課題は昨年度と共通している。英語の語彙力を身に付ける必要があるということである。しかし，ただ単に語彙を増やせばいいというものではなく，自分が伝えたい分野，深めたい分野の語彙を意識的に習得し，ある程度の内容の会話ができると会話に深みが出る。今後，授業においても，その点を意識して語彙の幅を増やしていきたい。伝えたいこと，伝えたい気持ちがあるのにそれができないのは大変もどかしい。児童生徒とともに，そのもどかしさをバネに英語学習をさらに活発にしていきたい。